

---

# 転生者のごとく！

カッシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生者の「」とくー！

### 【Zコード】

Z2436BA

### 【作者名】

カッキー

### 【あらすじ】

ある日、よく分からんが死んでしまった俺はテンプレな転生に恵まれず、なんか身体能力が、上がつただけで、何の世界か分からなまま転生。しかも数年後、駆け引き大好き親共に借金を押しつけられ、黒の組織みたいな奴らに追われて、よく分からん内に関西弁の少女「愛沢咲夜」なる人物に建て替えられた俺の借金を返すために、よく分からないまま、愛沢咲夜の執事になる。つて……よく分からないまま多くね？

ハヤテのごとく！の一次創作です。メタ発言多く、更新不定期です

が、よろしくお願ひします！！

## テンプレート実は運がいいのだと誓つ（前書き）

こんには、ええ、色々な小説の更新が止まつていて、更新すべき小説をこの一ヶ月更新してないで、この小説を書いたカッキーです。始めてまして、またはこんにちは。

最初オリキャラしか出ません。つん。すみませんでした…。（何故?）

## テンプレって実は運がいいのだと気づく

最初に言わせてもらひつ。俺はこう願つた訳だよ

なんか死んでしまつて、あつ、殺しちゃつたごめんなさい。てへペ  
ろ。みたいな感じで神様的なのが出てきてそのお詫びに初期からチ  
ート性能を持つて転生して色々と騒いで、  
かつこよくフラグを立ててハッピーエンドで、終わらせる。そんな  
展開を俺は望んだ訳だよ。

だが、人生そう上手くは行かない。例え転生に成功したとて、なん  
か色々とこまつたりするはずだよ。

うん。それが俺。転生に成功したけど、なんの世界かしらねえし、  
なによりチート能力も、持つてない。ただ、運動すれば伸びるらし  
い。

当たり前だけれどもね

そんな俺の話をするにはまず、神様みたいな人と会つといふから話  
し始めなければ、長くなるが聞いてくれると嬉しい。

つてか、今ナレーションしてる俺、もう出番終わりだから。過去の  
俺にバトンを回してあげようじやないか！－

だが、これだけは知つててほしい。

人生つてそう簡単に上手く行かないんだって

――

いや、教師とかに消しゴム投げたり！そんな事はしたりしたけども！…別にそんぐらいだよ…こんな世界にいきなり迷い込むなんてど

……

どうしてでしょうへ。何故かわつあまで、公園で遊んでたはずが、レインボーな空間の中、立つてゐる。いやいやいや、なんだこの世界。僕、なんか悪いことしたつけ？

\* \* \*

んだけ教師に消しゴム投げる事が悪い事なんだよ！

注、こんな事をやる人は悪い人だよ！良い子の皆は真似しないようにネ！ってか僕は悪い子だからやってもいい（r'y

そんな事を考えているときなり眼鏡かけた人物が現れました……

え、なにこの罰ゲーム。こんな眼鏡外すと可愛いできなギャップ萌えのキャラの人に舌抜き地獄とかやらされるんですか！

地獄は思った以上に怖い所だな

そんな事を思い身震いをする。ヤバイ近づいてきた……あー、このレインボーな地獄で俺は殺されるのか…………お父様、お母様。さよなら。僕を育てくれてありがとう。

「」の度は「すいませんでした！……」「…………え？」

うん？ちょっと待て。今、なんかこの度はって言わなかつたか？そして俺。冷静に考える。大体こんな所に地獄があるのか？

「あの～すみません。」って、ビックリすかね？」

「えーと、神様の家の多田的室ですが……」

「……」

あー、多田的室ですか。その前の神様やらなんやら云々はお~いといてさ……言わせてもらひつとれ……

「『ひなつかしきさんの』の世界……」

公園を抜けた先は多目的室でした。『ひ』の『ひ』でも『ア』だよ……。  
これじゃああのネコ型ロボットもなんでこんなに早く『ひ』でも『ア』  
が……と言つて驚きの表情だよ！

わっと……多分……！

「あ、申し遅れました。私、神様の秘書。天使です。よろしくお願  
いいたします」

天使つて……きっと作者がこの一回だけの登場だしへつに名前な  
んてびーでもよくね？みたいなノリだったんだろうね

と、その前に

「えーと、『ひ』、僕は『ひ』いるんですかね？トンネルの先は  
雪国という事はわかりますけど、公園の先がこんなレインボーな多  
目的室なんて。あり得ませんよ？」

多分人間で始めてなんだらう！嬉しくてなんか田からなにかが垂れ  
てきたよ

「ああ、詳しくは神様から聞いてくださいな」

そう言つお、なんか急に視界が暗くなつて、すぐ、明るくなつた。  
田の前にいたのは……

「ああ、お前か……部下のクソ野郎のせいで死んじまつた野郎は」

目つき悪！－なにこのひと！－えつ！侵入者ですか！つてかどこつすかここ！－しかも、俺、貴方様の様な輩と戦いたくない！

「神様。その通りでござります」

神様ってこんなんだったのかよ!!!!え?ちよー!大丈夫だ  
をしろ、俺。頑張れ。なんとかなる。そうだ、頑張れおれ!  
呼吸

「俺はなんでこんな所にいるんですかね？」

——ああ、死んだから

- 1 -

- 1 -

「え？」

「だから死んだんだつて」

一瞬、全ての思考が止まつた。何故だらう。とにかく止まつた。止まつてしまつた

「ウニヤク」

叫んだ瞬間怒鳴られた。怖い。やつぱ」の人怖い

「俺の部下がちっと仕事に失敗してな、運悪く、お前が死ぬ運命にあつた」

「たつた少しの失敗で？」

「ああ、大丈夫だ。精神的に死刑にしといたから」

「……」

大丈夫じゃないだろ、という突っ込みを抑えて恐る恐る聞いてみた

「で、死因は？」

「聞きたいか？」

「……」

つばを飲み込み、意を決して頷く。なんだ……とてもなく嫌な予感がする

「石でつまづき打ち所悪く……直ぐに息を引き取った」

「……」

聞くんじゃなかつた

「それで、俺をどうする気なんですか？」

「いや、決まってるだろ？ 転生だよ」

「……え？ マジで？」

ヤバイ、死んでよかつたかもしない

「大マジ」

この神様マジで挙げるレベルだわ。感謝します。ありがとうございます。ありがとうございます。神社にもっと行けばよかつた 現金な奴

「で、能力は？」

「は？ なにいつてるんだ？ ないに決まってるだろ」

「……へ？」

「なんでも貰えると思つた！ 狩れ！ 狩るんだよーーー！」

「なにをだよーーー！」

「ああ？」

「すみませんでした。調子乗りました」

うん。突っ込むのはやめよう。次は俺の命が危ない

「とにかく、身体能力は上げておこう、ゴムゴムのなんとかとか、死ぬ氣でなんとかとか、その幻想をなんとかとかその類の能力がもらえると思ったら大間違い！ 人生そんな甘くねえんだよーーー！」

「ええー」

納得出来ない。

「で、どこの行くか」「ランドーム」……

もうここや、突っ込むのめんどい

「じゃあ行つてらうしゃー。さつやと死ねよ」

「結局、ほとんど私出てなーじやないですか」

「はー。じゃあよつなり

れつせと行つた人達、僕は相手に出来ない

そして、俺の視界は暗闇に包まれた

テンプレって実は運がいいのだと書つ（後書き）

感想、アドバイス待つてます！！

困った時は相談した方がいい。これ常識（前書き）

関西弁が予想以上に難しい

困った時は相談した方がいい。これ常識

「ハアハアハア……」

気付けば公園に着いてた。額の汗を拭う、どうしてこうなった？  
皆さんお久しぶり。只今1・3つまり中学一年生の乾 ハヤトです。  
ハヤトはまあ、ホントは隼人つて書くんだけども何故かそうしなき  
や、いけない様な気がするからカタカタにしておこう

そんな俺がどうしてこんな汗だくだくで公園にいるかと云ふと、追  
われているから

まあ命がけの鬼ごっこ。いわゆるリアル鬼ごっこって奴

うんー笑えないや（泣）

まあ、ことの成り行きはといふと三十分前に遡る

「金が……アレ?」

新年、一月一日、初詣から家に帰つてくるとなにもなかつた。ただ一つの便箋を除き、

便箋には『ハヤト君へお年玉』と書かれてあつた。

「おお、今年はいくら入つてるかな?」

それを見た途端、なにもないといふことを忘れて便箋を切つた

ウチの親共は自由主義だ。つてか仕事ではなくパチンコ、競馬、麻雀、などなどをして金を稼いでる。無論、そんなもので稼いではいけないと思っていたのだが、実際立派なほど稼いでいたので、その年の儲け金額によりお年玉、お小遣いなどなど、お金に関わるものはずべて変わるのである。

それが結構スリルがあつて俺は好きなのだ。

だが、それも今までだつた。

「あれ？」

落ちて来たのは、紙と、落とし玉と點つてあつた玉だけだった

「え？ なにこれ？」

「だらな！！！」

え？ 今年のお年玉なし…？ どうしてくれんだよ…！

そう思い落胆しながら、紙を拾つ。

「何だこれ？」

拾つた紙にはこれこそ人生を左右するような事が普通に書いてあつた。

『借用書￥84・608・500』

「……え？」

一瞬目を疑つた。ええと八千四百六十万八千五百円…

ええと……横には『頼んだぞ、わが息子よ』

「……え？」

紙の中にまた小さな手紙があつた

読んでみると

「……」

『あ、「ゴメン溜まりに溜まつてた借金、限界みたい。大丈夫だ！お前なら出来る！－あ、そう言えば一応ちょっと知り合いに臓器、金で売るつたから、返すかどうかしないと、お前死ぬよ。まあ大丈夫。お前なら出来ると、私達は信じてるわ

パパ、ママより』

「オラあ－－乾、金が臓器出せや－－！」

「……」

やべええええええええ－－！－－！－－！－－！

どうやつて逃げればいいんだよ－－！

あつ－－そうだ！

窓は……よつしゃー開いてる－－

すぐさま窓を飛び越えてダッシュして逃げる

「待てやコラアアアアアアア」

俺は昔イカサマをやつてたんでね！逃げ方は熟知してんだよ－－！

まあ、したくなかったけれども

つてか、なんですかねコレ！俺、あきらめて、普通に生きよつかない  
と、思つてた矢先なんなんでしょうかコレ！

\* \* \*

「ふう……まいた」

つ……疲れた……やっぱチート能力は欲しい。どんな平和な世界で  
もこんな世の中一つぐらい持つてもいいんじゃないのかな？

「ハアハアハア」

つてな訳で冒頭シーン

「びひしよ、もう頼るところない。考へてもみろよ。親が仕事してなければ、他の親が乾君には関わらない方がいいとかいうから昔から友達なんてほほ、いなかつたし。親戚なんて知らないし……」

「いつぞ、この寒さだ。凍死してしまおつかな

「どないしてん?」

よく考えれば、これが俺の大きく運命を変えた一つだった。いや、もつ運命の出会いとかそんなレベルだった。

「へ?」

不意に尋ねられ後ろを向くと小学生ぐらいのショートカットの少女が立っていた

「だから、どないしどうねんって」

「ああ、俺はついに小学生に心配されるようになつたか……ハア……

「いや、なんでもないから、大丈夫」

「いや、絶対なんかあるやう?・ウチ暇だから相談のるで」

「いやいや、なんでもない」

「相談のゆでつて」

「いや、だからいこつてー」

「あ、いこつてと言ひ事はなんかあるとこひ事やひへな、乗らせて  
くれ。お願ひします」

「え？」

なんでしょうかこの展開、相談乗らせてくれだせこつてお願ひやせら  
れたのは初めてなんだけども

まあ、小学生だし……いいか

「わかつた。相談するから。ジュース買つからひよつと待つて」

「ホンマーならウチ、オレンジジュース頼みますわ」

「え？」

「ありがとな」

ああ、残り少ない全財産が……ああ

\* \* \*

「で、温かい飲み物じゃなくてよかつたの？」

「別にいいんよ。ありがとな。で、相談してくれるんだけやつ。」

「ああ……寒はな……」

で成り行きを説明をした。

「そんな事があつたんか……」

「え？ なにその反応」

「いや、「そんな重い話で、どう反応していいか分からなくて……」

うん。やつぱ。中学生がこんな相談びっくりするよな

「正直お笑いの話かと」

「ないから！！」

「え？ ないん？」

「いやいや、あんな深刻そうな顔してお笑いの話とかないだろーー。」

「いや、例えばなんぞ、いつもガキ使では松本が叩かれる数が多いんだろ……とか」

「なーいから!!!! そんな深刻そーな顔してガキ使の事、考えなーしからー!!」

「え、 そ、うなん？」

夜の公園に俺のツツコミが炸裂する

「損したわ、損。お笑いの事かと思つてた」

「ねえよ！正月にしかもこんな場面なのに考えねえよー！」「

ああ、もう！相談して損したわ！！

「じゃ、かえ「行くあてないんやね?」……」もひともです

「」のまま寝ると俺、凍え死ぬ。

「ひが、泊まつてく？」

「え？ マジで？」

「マジや。ウチ、アンタの事気に入つた」

その時、俺の瞳が光つたのは間違いないだろう

困った時は相談した方がいい。これ常識（後書き）

感想、アドバイス待っています！！

夢に見る城つて結構身近にあつたつる（前書き）

今回と次はギャグ殆どないです。あと、今回短いです

夢に見る城つて結構身近にあつたつする

「……へ？」

「「「「お帰りなさいませ……咲夜お嬢様……」「」」

「うふ。帰つたで」

どうしようこの状況！田の前にあるのがお城つて……すみません。  
ここ練馬ですよね？東京のあの練馬ですよね？

実はこの場所は日本じゃないみたいなのりじやないよね……。

「ホン、取り乱しました。

うん。いいたい事は一つ。ここで何県つすかね？いや、何国つす  
かね？

「入らんの？やつやと、入らんとドア閉めるで」

「行きます、行きます、行きます……」

閉められたら、死ぬといつ選択肢しかない俺はダッシュで玄関まで  
走る

「ふう……」

「なんや、お前足早いやないか」

「あ、そう、思つた事なかつた」

「いや、今の走りで気づかないなんて……まあいいわ、とにかく、  
そのリビングで休んどいて」

そつと右にあるリビングをさす。

……あ、あそこがリビングっすか。そつすか。俺の家の大きさ以上の大ささですね

なんだこの敗北感。まあとにかくリビングで  
待つてよ。話はそれからだ。

\* \* \*

「ふう、『ゴメン』『ゴメン』。父親と電話して遅れてしまったわ」

「いや……別に大丈夫だけども……え？ は？」

「旅行や旅行。なんかよく分からんが、あと、数日したら帰つてくれると思うつで」

「といつ事は一人で家にいるの？」

「ちやうちやう。家にはＳＰがいるし。全く  
、むしろ静かでいいわ」

「……」

ＳＰって……ああ、さつきのお帰りなさいませ！……とか言つてた  
人か……金持ちすげえ……大体練馬にこんな敷地あつたのか？ やつ  
ば、いじ日本か？

ま、まさか俺は未来に……

……

現実逃避やめよつ。うん。現実逃避はいけな

い。

「あ、名前言つてなかつたな。ウチの名前は愛沢咲夜。アンタはなんて言うん?」

「俺の名前は乾ハヤト。よろしく」

「タクミなーよろしくーーー」

と言つて握手を交わす。なんだこれ

「さう言えばどうするん?八千四百六十万八千五百円

「……」

その事考える前に記憶力よすぎだらーーと突つ込みたかつたがやめよひ、仮にも家にとまらせてもうつてるんだ。突つ込むのはなしにしよう

「まあ、今日一日この家で考えたらいいと想ひで」

「うふ。さうさせてもうらう。ありがとう

「礼なんてええてーまあとにかく……国枝ーーー卷田ーーーこの方に部屋を貸してやつてや」

「はーー咲夜お嬢様ーーー」

なんだろ?。さつきまで全く人が周りにいなかつたのにいきなり人が現れたのは何故だろ?ーーー

あれだな……世界の前に日本が広いといつても知つておかぬきやな

「ああ、はこれ。アンタにやるわ

「へ? なにこれ?

「部屋の見取り図。ないと結構迷うから気につけてや」

「お、お、おっかと」

……」今は、もう何度も言いつけど、練馬なのか?

「じゃあ、風呂は自由に使ってええから

「では、お客様。いらっしゃりです」

そう言ってS.P.に案内される。最早どうしていいつた?といつて  
ベルだが素直に感謝すべきだらう。うん。

\* \* \*

「うわお……」

え？ なんすかねえこの広さ俺の家（最早ないけど）より数倍でかいっすよね

……

つてかぢりじみづ。せつぱん働いて返すべきだけじも……あの雰囲気から見て絶対に「あ？ 臓器売った方が早いだろ？」「とかなんとか言って働く前に死ぬだろ。

……

ダメだー。そつなつてこいつ自分を考えるんじゃない！……感じてもダメだ！

「はー。やつて寝よ。」

風呂は明日入ればいいや。

そう思つてもう布団に入る

……あつたかい

こんな暖かい布団に入ったの何年ぶりだらう。

いや、初めてかもしね。親も遅かっだし、まあギャンブルやってただけだけと……

急に瞼が重くなってきた。ああ眠い……眠いよおー

\* \* \*

「きて……きてください」

どこからか声がする。

「起きてください……」

「はい……」

耳元で言られた。イタイ、

窓をみるとまだ真っ暗。今何時だ？

「大変な事になりました！！」

「へ、何が？」

まだ頭がぼーっとする。だが、次の言葉で、目が覚めた。

「咲夜お嬢様が誘拐されたのです！！！」

「え？」

その瞬間、俺の体がかつてに立ち上がっていた



夢に見る城つて結構身近にあつたりする（後書き）

次の話で、ハヤトが執事になります。うーん次の話しも多分ギャグなしだからなあ……  
どうしよ

**最終的に助かってしまう主人公補正は最強（前書き）**

今回、原作と似てしまつたなあ、まあ読んでいただけると、ありがとうございます！

最終的に助かってしまう主人公補正は最強

こんばんわ、ハヤトです。今、車を追いかけて自転車で走っています。  
なんでかって？そりゃあ助けるためだよ。誰をかって？

そりやあお嬢様に決まつてゐる……つてね

「おまうへい二つあります。」

「ちょっと待ってくださいー。どうやって行くんですか？誘拐先も分からないんですよー！」

「……どうにいるんですかね？」

さつきの場面から三十分ほど前、早々と着替えて、自分でも何故か分からないが助けなければいけないという思いが体中を駆け巡っていた。

名もなきメイド（まあつまいモブ）に起しきれ、咲夜さんが誘拐されたらしいと聞かされた。

「一応電話が来た時、瞬時に逆探知に成功したので、場所は分かりますけど……というか誘拐犯は車で移動しているのでどこにいるかはもう分かりきつてます。ただ……」

「ただ？」

「今日は正月なので、殆どのSPが休みで……朝ともかく、夜はないので、行こうにもいけないんです」

「大丈夫ですよ。さつきの通り、僕が行きますから」

「ですから、部外者に頼むという事は「大丈夫です！」……え？」

「だつて、あの人は僕にとって命の恩人です！だから助けます！借

りは返せなきやいけないので！」

力強く言い返した。助けるのは当たり前だ。咲夜さんに声をかけられてなければ、俺はもう、外国の密輸船かなんかに乗っちゃつたりしてゐかもしれないし。

「分かりました。けど、どうやって行くんですか？」

「そりゃ決まつてますよ。大体、中学生がバイクの免許なんてまあ持つて……ないですから、アレで行くしかないでしょ」

実は色々あつて一応持つてたりする俺

「アレって？」

「そりゃ もう……

自転車に決まつてるでしょう？」

その瞬間メイドさんが凍りついた

「え？どうしたんですか！？」

「自転車……ですか？はい、分かつてます。ナビゲートは私がしますので心配しないでください」

あきらかに作り笑顔のメイドさん。そう言つてこの部屋から出でてくる時にもうダメだ……とか聞こえたのは氣のせいではなかろう。いや、あえて氣のせいだと信じじる。これがハヤトクオリティ

\* \* \*

車の車内、そこには、あきらかに誘拐されたと思われる少女——  
愛沢咲夜と、あきらかに誘拐したと思われるサングラスかけたチャ  
ラ男が二人いた

「で、ウチを使ってなにしようとしてん? アンタ達」

「そりや決まってる。身代金要求だ。お前の  
家は金持ちだしな。やつと一億は要求してやるぜ。楽しみにな」

「おお、兄貴。夢が大きくて惚れつけまづぜ」

「よせやい。テレるじゅねえか」

そう言つて笑い合つ二人。正直そこには同性愛のなにかを感じてしまつた咲夜はその他に、安心しているところもあつた。

それは身代金の大きさだつた。百億単位をとられると、一応色々支障が出てくるから心配していたのだが、一億だと、支障は出るかでないかの差で心配する事はなかつたのだ。そこで、咲夜はなにか面白い事をしようと考えて、このお題を出した

「なあ、誘拐犯」

「あ？なんかようか人質」

「ウチもつすぐ死ぬかもしれないやん」

「ああ、そつだな身代金を出さなかつたら殺すしかないしな」

「そこ」でウチ、お笑い好きやから最後の晚餐の代わりにウチを笑わせてくれや。そうしてくれたら、なにも残さず逝けるで」

そつ言つと、兄貴の方は得意気になつて

「は？まあいいだろ？俺の特上のネタでお前を笑わせてやるぜ！」

「マジでやるんすか？兄貴つて人を笑わせるセンス」「つるせえ…！」笑わせると言つたら笑わせんだよ！」了解つす兄貴

「ほら、自信あり気な様子やな。はよ言つてみい」

「はつー言われなくともやつてやるぜ」

そつぱうと、車の中にしんみりとした空気が流れる。何故こんな空気になったのか、疑問に思つかもしないが、今となつてはどうでもいい事である

「行くぞ

車が来るまで待つてるかー」

「…………」

「…………」

一人の頭の中にえ?といふ言葉が生まれる

「えーと、それってまさか……」

「い……一発ギャグつすかね?」

「やうだけども、これ上手くね?」

「…………」

「い……ウマイイつすむつ最画つすよ兄貴ーーー」

「やうだら、そうだら?」のギャグは結構かんがえたんだぜ。嬢ち

やんばぢづだい?」

「……ゴメン。全然おもろくない」

その瞬間。兄貴の方からピキッ...といづ音がでた。

「なんだと……」

「大体一発ギャグって、こいつ時はネタを瞬時にかんがえて一人で言つもんやろ? 一人でやるならもうとおもうにネタを考えろや」

「……てめえ、今、自分の立ちどいろが分かつてねーよだな」

「分かつとんねんけど、お笑いに關しては別や、どんな時でもお笑いに關しては厳しいで!」

「そりゃのを……立場が分かつてないと言つんだよーー!」

いきなり、兄貴が殴りかかるとした時、車の前には一人の少年が自転車にまたがっていた。

「咲夜さん! 助けに来……」

「あぶねえ! ——!」

「ハヤト! ——!」

その少年は出て来た途端、車に正面衝突してしまったのだ。

転生者の「ルルベー」

「元」

\* \* \*

「ついて、終わらせてなよーーーー。」

『どうしたんですね?』

「いや、未来のナレーションに突っ込みを」

『はあ……といつか、自転車つてそこまで早さでるんですね』

今、自動車を追いかけてます。自転車にカーナビついてた事にびっくりしたけど、今それに感動してる場合じゃないんで、ダッシュボード

「いま、力抜いてますよ。入れすぎると通りすぎるとかもしれないの一応力を抑えているんですよ」

『ハハ……そなんですか。といつか前にもつ目的の車があるんすけど……』

「マジっすか？結構早かつたってか……あそこだけ、寒い空気が流れてるんすけど……」

『気のせいですよ。さあ早く行きましょうワーストスパートですよー!』

「了解ー！」

そつと車にスピードをかけ、車の上をジャンプするー!。

「咲夜さんー助……グハッ！」

ヤバイぶつかっちゃった。もう俺の人生終わりか……

「ああ、ハヤトに生命保険をかけといて良かった。これでまた思う存分ギャンブルできるー!」

「良かつたわねアナタ」

「「ハハハハハハハ」」

いや、終わらせる訳にはいかねえだろーー！

「つおりやああああああああ！」

「轢かれてなんで立てるんだよーー！」

「主人公補正なめんなあああああああーー！」

「良かつたわ……」

車のガラスを正面から割り血まみれの顔で一言

「咲夜さんを返してくださいね

「「は……はい」」

これにて、誘拐事件は終わりを告げた

\* \* \*

「はあ……大丈夫？ 咲夜さん？」

「ウチは大丈夫やけど……アンタの傷の方が危なそうやないか！！」

「いや、借りは返すのが俺の信念だから。出来れば住み込みの家を探してくれると……嬉し……」

数十分後、流石に我慢できずに倒れてしまった、ハヤトに応急処置をしていると巻田と国枝が現れた

「すみません。私達が休んでたせいでこんな事に……」

「いいねん。ハヤトが守ってくれたし。殴られるといりやつたんやで？そこにハヤトが自転車で車を飛び越えたんだけど、……」

咲夜はハヤトを大変気に入つたようで、ずっとハヤトの武勇伝を話していると、流石にずっとマズイので、国枝が割つて入った

「それで、この乾ハヤト。ビッシュまじょうか?」

「ああ、ウチの執事にさせるとわ

「え? ホントですか?」

巻田が驚いたような声を出す

「なに驚いてん。どうせ住み込みの家を探していたんやし、丁度いいやないか」

「ですがお嬢様」

「なにか文句あるん?」

「いじりいません!」

といつ訳で本人の知らぬ間に話しが着々と進んで行つたとさ



## **最終的に助かってしまう主人公補正は最強（後書き）**

最後がちょっと投げやり感だしてますが、この結末しか思い浮かびませんでしたので、すみませんでした！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2436ba/>

---

転生者のごとく！

2012年1月8日18時48分発行